

昨年の七夕の日、彫刻家の流政之先生が亡くなりました。御年95歳でした。改めて哀悼の誠を捧げます。「自分はバレンタインデーに生まれたので女性にもてる」と公言してはばからなかった先生のことです。牽牛と織り姫が会合する日に亡くなられたのは、何かの導きがあったのかも知れません。それから1年。先生が制作スタジオ兼住居としていた志度湾に臨む庵治半島の丘の上にある城塞のごとき建造物は、新たに「ナガレスタジオ 流政之美術館」として生まれ変わろうとしています。

流先生がこの地を最初に訪れたのは、1960年。ぶらりと立ち寄ったところが、理想的な石のふるさどだったとして、すぐさま活動を始めたとのこと。それと同時に、庵治石の産地の優れた加工技術を後世に伝承していかなければならないと、若い石工を集めて「石匠塾」なるものを作りました。昼間は彫刻技術を教えながら、若い女性が憧れる石工たちに育てて欲しいと、スーツの着こなし方や、パーティーでの振る舞い方、洋式トイレの使い方まで伝授していたというから驚きです。

そして流先生が「石匠塾」のメンバーを率いてニューヨークに渡り、世界博覧会の日本館にそびえ立つ巨大な石の壁画「ストーンクレージー」を築いたのが、アジア初の「東京オリンピック」が開催された前年（1963年）でした。巡り合わせか、東京2020オリンピックの開催を翌年に控えた今年、6月上旬に開催された「あじストーンフェア2019」では、「石匠塾」の当時の活動を伝える写真やアメリカでも大人気となった黒澤映画になぞらえて「7人の侍」とも呼ばれた渡米メンバーの貴重な遺品などが会場に展示され、来場者の注目を集めていました。

流先生が石匠塾にかけた熱い「侍スピリット」は、二度の東京オリンピックの時をまたいで今日まで受け継がれています。その思いが詰まったナガレスタジオの城門がいよいよ開かれ、一般公開されることを、大変嬉しく思っています。

ナガレスタジオ 流政之美術館 #upTAK

